HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	工藤信彦著『職業としての「国語」教育 ： 方法的視点から』
Author(s)	金沢, 英之
Citation	国語国文研究, 154, 52-54
Issue Date	2020-03-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/89710
Type	journal article
File Information	Kokugokokubunkenkyu_154_52-54.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

【書　評】

工藤信彦著『職業としての「国語」教育――方法的視点から――』

金沢英之

本書『職業としての「国語」教育――方法的視点から――』（石風社、二〇一九年九月）の著者、工藤信彦氏は、北海道大学文学部国文学科に学んだ後、札幌南高等学校、藤女子高等学校、そして東京の成城学園高等学校において長く国語教員をつとめた。高校教師としての期間とその後を通じ、氏は、国語教育や学校のあり方を方法的に問う多数の論考を、本誌『国語国文研究』をはじめとする様々な媒体に発表しつづけてきた。本書は、それらの成果を一冊にまとめたものである。はじめに目次によって構成を示す。

解説　「国語教育」の方法と原理を問う（中山智香子）
「学校国語」について――序にかえて
第一章　高校「国語」教師の仕事
方法としての「国語」／私言（ささめごと）――学校のできること／「国語」の領分――〈方法としての国語教育〉観／職業としての「国語」教育――教師論の視点から／国語の力について――感覚は教えられる／言葉で読む人／短歌教育の功罪――高校国語教師のノートから
第二章　「国語」の授業から
『伊勢物語』を読むためのノート――「古典」入門／古代和歌を読む／『徒然草』第四十五段／『徒然草』第百四十一段／『伊勢物語』第二十四段／『源氏物語』冒頭文を読むために／志賀直哉『暗夜行路』序詞を読む／中原中也「北の海」を授業で読む／芥川龍之介『羅生門』の読み方

第三章　文化としての『国語』

「作文」の思想――その現代的意義／言語のマトリックス――新・文法　入門学／「国語力」回想／工藤信彦のＣＨＡＬＫ　ＴＡＬＫ　「『わたし』ってだあれ？」／日常性の解読――「ＦＯＲＵＭ―７シンポジウム（二〇〇二年度版）

痕跡　点・点

私の17才――遅れてきた少年／郷愁と格闘　アルザス日本校――創立の一年体験、若い国際人に期待

あとがき――さらば「国語」

インサイド・アウト（松田晃）

「「学校教育」について」と題された冒頭の一文で、著者は〈学校〉を「教えるプロと教わるプロが、同時間・同空間で言葉によってパフォーマンスし合う生活空間」と規定し、「教材としての一つの文章を、一人の教師と不特定多数の生徒たちとが、共有する論理で〈文章〉を読み解く方法の会得」を、自らの教育の課題とする。それも、「思ったり考えたりすることが重要なのではなく、それらを言葉にして書くことで初めて〈国語力〉となる」という。〈共に読む〉ことで共通の理解を持ち、それを〈書く〉ことで伝え、確認する。その実践がテストとなりその評価となる。そして、その作業を支えるのは、徹底的に個々の作品のテクストに即した読解、論理的な読みの営みである。

第一章には、こうした著者の仕事の中核となる思考、高等学校における〈国語教育〉を方法として問うた諸々の論考が収められる。方法として問う、ということの具体例を挙げれば、たとえば選択肢問題の作問。複数の誤答のみが共有し、唯一の正答との間を分かつ情報は何か。必要なのは、分類し、比較し、識別する数理的処理能力であるという。差異と識別の論理を正しく備えた設問から、回答者が正答を選択する。その選択の理由を文章化することも〈国語〉であり得るのだとする視点がそこにある。

また、たとえば文法の教授について。文法もまた、共通項と異質項を区分し系統づけた大系である。活用表をただ暗記させるのではなく、なぜそのような活用のマトリクスが生まれてきたのか、その背後にある論理の筋道、認識や感性を理解すること。「どうおぼえるかについての理論」こそが必要ではないかと著者は説く。

そうした方法のひとつひとつは、すべて「共有する論理で〈文章〉を読み解く」ためにある。ただ感じ、考えて終わるだけではない、それを言葉として伝え、他者と共有し、説得するための力の獲得、それこそが教育であるとする主張は、この第一章の通奏低音として繰り返し現れる。

つづく第二章には、著者が実際に高校〈国語〉の授業その他で作成し用いたプリント資料が収められている。第一章で提示された理論と考察が、授業という場での具体的な実践とあいまって、生きた教育の姿として立ち上がってくるのは、本書の大きな特徴であり魅力であろう。

『伊勢物語』『源氏物語』『徒然草』といった古典、あるいは志賀直

哉や芥川龍之介の小説、中原中也の詩といった誰もが知る作品を、聞き手の生徒に向けて語りかけるような口調で読み解いてゆく。授業の資料がそのまま読み物として成立し得るその強度に驚かされる。いささか私事に及ぶが、評者もまた、高校時代に氏の教えを受けた一人である。『伊勢物語』第百二十四段（梓弓）のプリントは、まさに高校一年生の私が、授業で手にしたものであった。このたびの再読で、当時は気づくことのできなかった読みの細部にわたるひだの細かさ、それを伝えようとする文章の熱量に圧倒される思いを味わった。

時に作品の背景となる時代の説明を織り交ぜ、時に読みのコードを抉別する構造的な読解を披露しつつ、対象に応じて手を変えつつも、その根底に一貫するのは、「そう書いてあるように」読む、「誰もが読めるように」読むという志向である。そのためには、一人きりの読書を越えて、他者とともに一冊の書物を読む、その読みの共有が求められる。そこに、〈学校〉という場の必要性も顕わになるのである。

第三章には、第一章の理論を語る中で触れられた個別の事柄を補足し敷衍する文章や、実際の授業の体験の中で感じられたことを綴った文章が収められている。前二章とあわせて読むことで、本書全体の理解もより深まるであろう。

末尾に、「痕跡　点・点」と題して、少年時代の文学や詩との出会いと、成城学園高校時代の後期にフランス・アルザスのコルマール市に設立された、アルザス成城学園中学校・高等学校の立ちあげと現地での教育に携わった体験とを記す二編を収める。さらに、巻頭と巻末には、中山智香子氏による、著者の経歴や影響を受けた思想への目配りも行き届いた解説と、松田晃氏による、実際に著者の授業を受けた経験と本書が編纂されるに到った経緯を記した一文を付載する。

以上、本書の内容を駆け足で見わたしてきた。本誌の読者には、高校や中学の教員を目指して大学院に籍を置く者、あるいは実際に教職に就き実践の日々を送る者も多いだろう。本書は何よりもまず、そうした方々の手に取って欲しいと思う。学校教育という枠組みの中で何を考え、何を伝えることができるのか、そのために必要なことは何か、あらためて振り返ってみるためのヒントと刺激を、本書のあちこちに見つけることができるのではないだろうか。

同時に、テクストの語るところに耳を傾け、他者と共有することのできる、すなわち客観的な論理にもとづく言葉で読み手を納得させ、説得するという、著者の基づく方法は、文学研究の基本原理そのものでもある。そうした意味で、本書はこれから論文を書き研究者を目指そうとする者にとっても、有益な示唆と読みの実例を示してくれることだろう。単に高校〈国語教育〉をめぐる思索と実践の書であることを超えて、言葉によって読み、書くことの本質に思い至らせてくれる一冊である。